磨製石鏃が出土するのは，南部地域に片寄っていることが理解できる。南九州における薩摩半島南部と大隅半島南部の共通点は石器石材原産地との関係でとらえることができる。

石鏃などの小型の剥片石器を容易に製作するための石材はガラス質である黒曜石あるいはチャートなどが適しているが，これらの原産地は薩摩半島南部や種子島には存在していない。ただし，坊津町牧場や枕崎市東鹿篭では鉄石英の原産地が所在しているが，産出する原石はかなり硬く押圧剥離は容易ではない。

また大隅半島南部には黒曜石原産地として長谷があるが，長谷産の黒曜石は粘りがなく，小型の剥片石器製作には向いてなく，石鏃などには全く使用されていない。そこで容易に入手可能な居住地周辺の頁岩や粘板岩などを利用するため，頁岩・粘板岩，それらの岩石特性に適した石鏃製作方法が磨製石鏃であったと考えることができる。このことは磨製石鏃の出土分布が的確に示しており，製作の背景の一つであると考えて間違いない。

黒曜石原産地やたんぱく石原産地に比較的近い建昌城跡や，黒曜石原産地に近い前原遺跡では打製石鏃が多く，磨製石鏃は極めて出土が少ないことも，これを裏づける。

また研磨による道具の製作は，骨角器による利器製作に適した方法であることより，磨製石鏃の存在は当時骨角器による利器が存在し，石鏃も同様の技術を応用して製作された可能性も，背景の一つとして考慮する必要があろうか。つまり，結論として言うならば，磨製石鏃が製作された基本的な背景は，比較的遠隔地のガラス質の石材を使用しない，遺跡周辺の在地の石材を利用した石鏃として製作されたのである。

このことは，早期前半の岩本式土器から前平式土器の時期において生業的に広域的な活動（例えば狩猟の帰りに黒曜石を採取してくるような活動）は少なかったことを意味している。

前平式土器に伴う石鏃として小型三角形鏃の存在が知られているが，これは桑ノ木津留もしくは上青木産の黒曜石を使用するものであり，原産地周辺の遺跡に特徴的である。これも石材と器種形態の結びつきや関連を示す例である（馬籠 2002）。

次ぎに，種子島にのみ出土している塞ノ神式段階の穿孔型については，種子島のみの出土であることと深い関係があると推定される。すなわち穿孔があるものは，石材の代用のみではなく，機能・目的が穿孔のないものとは異なると判断される。鏃形で穿孔を有するものは，骨・角・牙・サメ歯・貝などにより製作されたものに多く認められている。これらは全国の地域で主に縄文時代後期～晩期の時期に出土しており，このなかには銛先として装着された状態のまま出土している例もある（金子・忍沢 1986）。穿孔は，そのものが目的をもって行われた[4]と考える必要があり，南九州では奄美大島から沖縄地域の琉球列島の縄文前期～後期に認められるクロチョウガイやヤコウガイを利用した貝鏃として多く出土している（盛本 1998）。これらと同様に銛先への装着を含む漁労具としての使用である可能性が高い。

磨製石鏃の穿孔型は，鏃形で穿孔が施された牙・貝・石製品の出土例として，全国でも最古の時期のものであるが，種子島で発生・展開したとは考えられない。本来骨や貝などで製作されるものが，種子島では主に頁岩や粘板岩によって製作されたものであり，その伝統は海が取り巻く文化圏のなかで伝播した可能性を考える必要があろう。

7　おわりに

磨製石鏃と同様の製作技術による磨製石槍あるいは局部磨製石槍が，岩本式土器段階に岩本遺跡やホケノ頭遺跡で共伴している。局部磨製石槍は，局部磨製石鏃と同様に広い地域で認められており，狩猟対象動物や狩猟方法などを含めて，製作された背景も今後検討していく必要がある。

磨製石鏃が製作される背景は，黒曜石などの石材入手が困難などの理由が存在するためと，磨製石鏃の製作に都合のいい石材である頁岩や粘板岩が近くに存在したためであり，南九州という単なる地理的要因からの独自性ではないと言える。ただし，当該期における他地域の非黒曜石地域において全磨製石鏃はほとんど認められず，その意味において必然的にやはり南九州の特殊性として理解する必要がでてくる。つまり石材代用に伴うそれに適応した製作技術という主たる背景とは別に，もう一つの隠れた背景の存在が想定されうるのである。

ここで磨製石鏃の形態について視点を変えてみてみよう。古い形態である長身細型（荒田原タイプ）のプロポーションは，縄文時代草創期の加栗山遺跡出土例や掃除山遺跡出土例などの打製石鏃とは形態が異なることに注意が引かれる。特に基部近くで幅が狭くなり，そして基部両端は逆に幅が広くなり両端は尖る。研磨による整形は，打製よりはるかに自由であり，意識した思いそのままの形が反映できるという特徴がある。つまりこのような形態は意識的なものであり，何らかの形をイメージしたものと思われる。この独特なプロポーションはアオザメのサメ歯をほうふつとさせる特徴であり，海の文化としての南島的な系譜も示唆されうるのである。

また鋸歯縁型については，ホオジロザメのサメ歯を模倣した形態と推定されるのである。

そうなると，縄文時代草創期の栫ノ原型石斧が黒潮圏との関係でその存在が考えられている（小田 1994・1998）ように，磨製石鏃も中国南部を含む黒潮圏との関連を考慮する必要もあろう。今後の新たな展望として磨製石鏃の系譜を追求するためには，黒潮圏地域の貝鏃や骨鏃を視野に入れる必要がでてきそうである。